

ポンテデリア・ランセオラータの栽培と養分吸収特性

河合 敏彦・兼房 美奈子*

中山間地域等の排水不良田は、畑作物の作付が不適地である。そこで、放棄あるいは荒廃田となった水田の有効利用と景観形成を図る目的で、水生植物「ポンテデリア・ランセオラータ」の栽培法を検討した。また、環境にやさしい花きとして水質浄化の可能性を明らかにするため、無機成分の吸収量を調査した。

1. 方法

[試験1]水深が開花本数、切花形質に及ぼす影響

定植日;平成6年4月14日。

ほ場;園芸分場内露地ほ場。

栽植密度;株間50cm, 条間50cm。

水管理;地下水常時かけ流し。

基肥;N-1kg/a(IB化成)。

追肥;平成7年3月14日にN-0.5kg/a(IB化成)。

試験区;水深10cm区, 0cm区, 畑地区。

1区4株, 2連。

[試験2]栽植密度が開花本数、切花形質に及ぼす影響

定植日;平成7年3月15日。

ほ場;園芸分場内露地ほ場。

水管理;地下水を常時かけ流し, 水深;10cmに設定。

基肥;N-0.5kg/a(IB化成:10-10-10)。

試験区;株間×条間(cm) 50×50, 50×30, 30×30。

2条植, 1区8株(30×30は12株), 2連。

[試験3]養分吸収特性

耕種概要は[試験2]に同じ。ただし, 株間50cm,

条間50cm, 通路1m(267株/a)。

採取日;平成7年11月29日。

2. 結果および考察

1) 水深が深いほど開花数は多くなった。開花時期は、6月から11月で、3か年の試験から平均開花始めは6月14日±2日であった。7月上旬から8月上旬が開花盛期であった。12月の降霜により凍害を受け、地上部は枯死した。露地据置きでの2年次の開花数は、植付け初年に比べて多くなり、特に水深10cmでは畑地の約3倍であった。切花長も水深が深いほど、また、2年次で長くなった(表1)。

2) 株当りの開花数および切花重は、栽植密度が密なほど減少したが、単位面積当たりの開花数は、栽植密度が密なほど多かった。切花長は大きな差がみられなかった(表2)。

3) 切花の乾物重は5.74g/本であった。切花中の無機成分含有率と開花期間中の切花総乾物重から植付け初年の吸収量は、窒素がa当たり501g, リンが191g等であった(表3, 一部データ略)。

以上の結果から、ポンテデリアは排水不良水田での栽培が可能であると考えられた。耐寒性もあると考えられ、露地での据え置き栽培も可能であり、中山間地域等の景観形成植物として活用できる。水深が深い場合、植付け2年次には生育量が3倍以上になることから養分の吸収量も増加し、水質の浄化が期待できる。

表1 ポンテデリアの水深の違いと開花本数、草丈

区名 (水深cm)	5月	6~7月	8~9月	10月~11月	12月	計	平均草丈 cm	2年 合計開花数 本/株	次 平均草丈 cm
	本/株								
+10	0	10.3	40.0	14.7	0	65.0	92.7	210.4	138.0
0	0	13.8	28.8	12.5	0	55.0	79.1	128.2	113.0
畑地	0	9.5	13.5	5.5	0	28.5	72.3	64.8	98.2

表2 ポンテデリアの栽植密度と切り花

株間×条間 cm	開花本数		切花長 cm	切花重 g/本
	本/株	(本/m ²)		
50×50	43.1	(115)	101.8	56.8
50×30	41.8	(129)	100.9	52.8
30×30	33.2	(170)	98.1	48.7

表3 無機成分含有率と吸収量

	N	P	K	Mg	Ca
含有率%	0.76	0.29	3.78	0.24	0.79
吸収量(g/a)	501	191	2,490	158	521

* 湖東地域農業改良普及センター